

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：32620

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26671021

研究課題名(和文) 実務経験者を対象とした認知症高齢者看護の学習・教育方法論の構築

研究課題名(英文) Construction of a learning/education methodology targeting nurses in nursing for elderly people with dementia

研究代表者

湯浅 美千代 (YUASA, Michiyo)

順天堂大学・医療看護学部・教授

研究者番号：70237494

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、実務経験をもつ看護師が認知症高齢者看護を学ぶ際の学習方法ならびに教育方法を理論として構築することであり、3つの研究を並行して進めた。結論として、実務経験者を対象として認知症高齢者看護を教育する場合の主要な課題として、「アセスメントについてどのように教授していくか」があげられた。この「アセスメント」の学習(教育)内容に広がりや深さがあることを示した。さらに、「認知症看護観」「認知症看護教育観」という哲学的、倫理的側面をもつ教育基盤の上に、さまざまな「知識」と「科学的・分析的な思考」を支柱とし、「認知症看護の実践方法」を積み上げるという教育の構造を示した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to theoretically construct the learning/education methodology targeting nurses in nursing for elderly people with dementia. This study consisted of three sub-studies. In conclusion, the main issue in educating on dementia nursing for nurses was how to teach assessing patients. The findings also suggested that broader and deeper learning/education contents are necessary to assess dementia patients. Furthermore, the findings suggested the structure that "How to practice dementia nursing" is supported by "various knowledge" and "scientific / analytical thinking", on based philosophical and ethical aspects such as "dementia nursing view" and "dementia nursing education perspective".

研究分野：看護学

キーワード：認知症看護 卒後教育 認知症高齢者 教育方法 学習方法 アセスメント 看護師

1. 研究開始当初の背景

高齢者の増加に伴い、認知症を患う人々も増加している。施設や精神科病院だけでなく、一般病院でも認知症高齢者が多く受療するようになった。しかし、ケアを提供する看護師たちは認知症看護に慣れておらず、また安静などの制限を守るために身体拘束を行うなど、認知症患者にとっては理解できない状況下で認知症症状の悪化や合併症のリスクが問題となってきた。認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)の中でも、医療・介護サービスを担う人材育成の目標について、一般病院の医療従事者を含めて提示され(厚生労働省、2012)、各都道府県では看護師、看護管理者向けの研修が企画されるようになった(湯浅ら、2013)。

認知症看護について、看護師に教育すべき項目・内容は多く提示されている(原ら、2012、堀内、2010)。また学習効果を高めるグループワーク演習、実習といった教育形態が提示されているものの、どのように教育するのか、教育者がどのように介入すればよいかを具体的に示した看護文献はみたらなかった。

英国のDownsら(2009)は、認知症の質を高めるケアの高等教育について、実践者の知識、技術、態度の向上をめざし、討議、クリティカルシンキング、リフレクションとアクション、すなわち経験学習を強調している。実務者が認知症高齢者の看護を学ぶ場合、机上での学習と実践(実習やそれまでの経験)を結びつける指導者や同僚とのカンファレンスが重要である。本研究の研究代表者・分担研究者も急性期病院における認知症高齢者への看護の質向上に向けた介入研究において、病棟内でのカンファレンスが重要とわかったが、管理者やリーダーがどのように介入すればよいか、具体的な教育方法は明らかにできなかった(湯浅ら、2013)。

また、効果的な学習方法の一つに臨地実習がある。認知症看護認定看護師や老人看護専門看護師では認知症看護を学び、実習も行う。しかし、学習者である実務経験者が自部署ではない臨地でどのように学ぶか、看護師として働いた経験をもつ学習者に対して臨地のスタッフがどのように関わるのか、教育を担当する者がどのようなケア対象者を把握し、学習者に介入するのかなどは、個々の教育機関、教育者、臨地の指導者に委ねられている現状があり、それぞれにとまどいや困難を抱えていることが示されている(宮下ら、2009、中村ら、2012)。

そこで、実務経験者が認知症高齢者看護を学ぶという視点から、学習者を支援する方法を理論的に位置付け、全体像を提示する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、実務経験をもつ看護師が認知症高齢者看護を学ぶ際の学習方法ならびに教育方法を理論として構築することで

ある。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために3つの研究を構成した。

1) 研究1

(1) 目的

認知症高齢者看護について、実務経験者に教育した経験をもつ者から、その教育実践知を明らかにする。

(2) 方法

ネットワークサンプリングにより看護の実務経験者に対する認知症看護の教育経験を探索し、7名にインタビュー調査への協力を依頼した。インタビュー内容は、看護の実務経験者への認知症看護教育にあたって、困難を感じたこと、うまく教育できたこと、工夫したことなどである。

全インタビューデータを逐語録とし、学習者の課題に相当する語りを抜き出し、それぞれ類似のテーマごとに整理してコードとし、類似性によりカテゴリー化し、その関係を分析した。また、教育方法の工夫や知見に関する語りを抜き出し、整理してコードとし、類似性によりカテゴリー化した。

順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会の審査により承認を得て実施した(平成26年6月26日付 受付番号26-4)。

2) 研究2

(1) 目的

経験をもって認知症高齢者看護を専門的に学んだ看護師から、その学習経験と学習支援ニーズを明らかにする。

(2) 方法

当初はインタビュー調査のみを計画していたが、対象者のリクルートの限界から得られるデータの不足があり、質問紙調査を追加して実施した。

インタビュー調査

ネットワークサンプリングにより看護の実務経験をもつ認知症看護について学習した経験をもつ者を探索し、6名にインタビュー調査への協力を依頼した。

インタビュー内容は、実務経験をもって認知症看護を学んだきっかけ、その教育を受けている中で特に印象に残っていること、学び方について注意した点や工夫した点、特に困ったこと、難しいと感じたことなどである。

全インタビューデータを逐語録とし、対象者別に語りの内容を整理し、主要なテーマ(主題)を導いた。

順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会の審査により承認を得て実施した。(平成26年6月26日付 受付番号26-4)

質問紙調査

対象者は、日本看護協会のホームページに所属・氏名を明らかにしている認知症看護認定看護師567人とし、無記名自記式の質問紙を行った。調査期間は平成28年1月~2月で

ある。調査内容は以下の通りである。

- ・教育を受ける動機、きっかけ
- ・教育機関に入る前の学習の準備状況
- ・講義、演習、実習それぞれの学習における困難の状況
- ・教育・指導方法について感じたこと、現在の仕事への影響

分析は記述統計と、自由回答部分の質的記述的分析を行った。

順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会の審査を受け、研究の許可が得られた後に調査を開始した（順看護第 27-42 号）

3) 研究 3

教育理論、学習理論、認知症高齢者看護に関する知見を集積し、看護現場で活用できる形でまとめた。さらに研究 1、2 の結果と合わせて学習・教育方法論として提示した。

4. 研究成果

1) 研究 1

(1) 対象者の概要

対象者 7 名は全員 10 年以上の看護師経験があった。6 名は看護師長の経験があり、もうひとりも主任の経験があった。全員が認知症看護認定看護師の教育に携わっていた。また、病棟スタッフや老人看護専門看護師の教育において、高齢者看護または認知症看護の教育に関わっていた。

(2) 対象者の語りから得られた実務経験者である学習者の学習課題

対象者の語りでは、認知症看護認定看護師の教育課程での学習に関する事柄が多かった。そして、実習での指導場面で感じた課題が多く語られた。また、実習生としての態度について課題があるとした意見が多かった。学習上の課題として【看護の基本技能の不足】など 6 つのカテゴリーを抽出した。

認知症看護において、患者中心、患者目線での看護が求められる。また日常生活ケアも同様にできること、そのためにスタッフなど他者との関係をつくるコミュニケーション力や調整能力が求められる。しかし、これらの【看護の基本技能の不足】が課題としてあげられた。また、【看護過程でのつまづき】が課題としてあげられた。これは知識や型に当てはめようとする傾向があること、適切な観察とその原因追究、および情報の整理・統合に基づくアセスメントの能力が不足していることから構成される課題である。その課題は、論理的思考やクリティカルシンキングができないことにも起因するが、アセスメントとは関係なく、学習者がしたいことをプランにあげる傾向にも起因していた。この思考パターンは学習前の職場での思考によるもので、看護計画をたてないことや IT 化の影響により思考力・文章力が身につかないことが原因としてあげられた。

学習過程では振り返りのための記録が重視されるが、【記録を書くための能力の不足】が課題としてあげられた。これには文章力の

問題もあるが、記録に至る客観視ができないなど、思考の問題も含まれていた。

学習者は認知症看護を学ぶ過程でこれらの課題を乗り越えていかなければならない。それは学習者にとって【自己の変容が求められること】という課題であり、ストレスフルな状況におかれると予測された。

(3) 対象者の行っている教育上の工夫

対象者は実務経験を有する看護師への認知症看護教育において、教育方法上さまざまな工夫を行っていた。特に、アセスメント方法の学習は必須であり、事例検討、グループワーク等を組み込んでいた。また、自己の振り返り（リフレクション）についても工夫した方法がとられていた。実務経験をもち認知症看護を学ぶ中で、学習者には自己の変容が求められる。そのこともふまえ、事前に心構えをもつよう学習者に関わることも行われていた。

対象者は認知症看護、認知症看護教育について、何らかの考えを語ることでできていた。すなわち認知症看護観、認知症看護教育観をもち、それを学習者に言語化して示していることがわかった。

一方、6～8か月の研修では、学習者が自分の考えを論理的に文章で表現するという力はつかないので、修了後の研鑽が重要であることも述べており、修了後も何らかの支援を継続していた。

認知症看護認定看護師教育以外（認知症看護対応力向上研修等）での教育については、短時間での研修では無理があるとしながらも、現場ですぐに活用できるものが学習ニーズとしてあることをふまえた授業構成や教材を考えていることがわかった。

2) 研究 2

(1) インタビュー調査

対象者 6 名は全て認知症看護認定看護師教育課程での学習経験があった。1 名は老年看護専門看護師教育課程での学習経験もあった。全員が調査時に認知症看護認定看護師教育課程の実習生への指導や病院スタッフへ指導など、実務者への認知症看護の教育を担当していた。

分析結果より、実務経験をもって認知症看護を専門的に学んだ経験とは、「実践にリンクした学び」「発想を転換する学び」「それまでの自己を脱皮する学び」であり、実践の中で認知症をもつ人を主体とし、その生活をよりよい状態への支援する認知症看護観が含まれていた。この結果は学習経験だけでなく、教育課程での学習後の実践や教育の経験を経て、学習について意味づけされたものも含まれると考えられた。

(2) 質問紙調査

307 人からの調査票返送があった（回収率 54.1%）。対象者の背景として、認知症看護認定看護師教育課程で学んだ時期は 1～2 年

前130人(42.3%)が最も多く、ついで3~4年前であり、教育課程増加を反映していた。認知症看護認定看護師の教育課程で学ぼうとした動機・きっかけは、「認知症看護に関して困っていたから」が218名(71.0%)と最も多かった。

授業形態別の学習の困難さについて4段階での評価では、講義で「かなり努力を要した」と回答した者は59名(19.2%)、演習は101名(32.9%)であったのに対し、受け持ち患者の看護過程を展開する実習は213名(69.4%)と多かった。

実習の中で特に努力を要したのものとして選択された上位3つを選択してもらった。その集計結果では、アセスメントが最も多かった(193名69.7%)、ついで実習施設・学校での発表(105名37.9%)、記録物(93名33.6%)、スタッフとのコミュニケーション(82名29.6%)、看護計画立案(79名28.5%)、実施した看護の評価(69名24.9%)の順であった。

実習の中で特に努力を要したのものへの学習支援は、実習施設の指導者による支援が最も多く(229名74.6%)、このうち130名(56.7%)が「特に支援の効果を感じた」と評価した。そのほか、実習施設での教員の支援(187名60.9%)、同じ施設で実習する受講生による支援(171名55.7%)も多いが、このうち支援の効果を感じたと評価したのは69名(36.9%)、71名(41.5%)であった。実習期間中に学校に戻り学校の教員から支援を受けたと回答した者は111名(36.2%)であったが、53名(47.7%)が支援の効果を感じていた。遠方での実習のためメールで教員から支援を受けたと回答した者も7名いた。

支援に関する項目への回答がなく、努力を要した場面で支援があったと感じていないと考えられた者が9名(2.9%)、教員や指導者から支援はあっても効果があったという評価がなかった者が66名(21.5%)、効果があったという評価が実習生間の支援のみの者が29名(9.4%)いた。これら計104名(33.9%)については、実習において教員や指導者からの学習支援の不足があると予測された。

さらに、自由記述を分析、統合し、実習における学習支援ニーズをテーマとしてまとめた結果、【指導者・教員の教育的関わりによる実習体験の形成】【成果を実感できる実習体験の形成】【具体的な助言、指導とモデルとしての指導者の存在】【実習で困らないための事前準備】【心身のストレスへの配慮】【関係者と円滑な関係性を形成するための連携・調整】【カリキュラムと学習環境への配慮による均質な実習内容・方法・評価の保証】があげられた。これらをふまえた教育を構築する必要があると考えられた。

また、実習以外の学習経験から、効果を感じた教育方法としては、グループワークやプレゼンテーション、体験的な学習、実践者か

らの生の声を聴くといったアクティブ・ラーニングであった。一方、その学習のために必要な事前準備の時間がとれないなど、全体的にタイトなスケジュールに対しストレスを感じている状況が伺われた。また、グループワークを進めるにあたって教員の効果的な関与を求める内容もあった。さらに、認知症看護認定看護師になって必要となるコンサルテーションなどの知識・技術の学習ニーズがあることなどが示された。

3) 研究3: 文献検討

実務経験者の認知症高齢者看護に関する学習を促進する上で、参考となる書籍を収集し、研究者間で検討し、活用可能な内容を下記の3点に整理した。

A【学習することについての知識基盤】として活用できる書籍を計7冊とりあげた。

B【看護師が日々の看護実践から認知症高齢者看護を学習し続けるための基盤知識】として活用できる書籍を計3冊取り上げた。

C【学習した知識を活用しながら認知症高齢者のアセスメントを適切に行う思考過程】の学習に活用できる書籍として計4冊をとりあげた。

D【学習すること、学習者に焦点を当てた成人学習理論の理解】に活用できる書籍として1冊をとりあげた。

特に以下に示すC、Dで用いた書籍は認知症高齢者看護教育への活用度が高いと考えられた。

・後正武(2010)。「論理思考」の本・PHP書房

・伊藤敬介、大西弘高(2016)。「ナースのための臨床推論で身につく院内トリアージ」学研メディカル秀潤社。

・Bazerman M.H., Tenbrunsel A.E.(2011). 池村千明訳(2013)。「倫理の死角 なぜ人と企業は判断を誤るのか」NTT出版。

・近藤直司(2015)。「医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技術を高めるハンドブック ケースレポートの方法からケース検討会議の技術まで」第2版・明石書店。

・Merriam S.B. et al.(2008). 立田慶裕ら訳(2010)。「成人学習理論の新しい動向 - 脳や身体による学習からグローバル化まで」福村書店。

4) 研究3: 実務経験をもつ看護師が認知症高齢者看護を学ぶ際の学習方法・教育方法の理論化

(1) 実務経験を有する看護師への認知症高齢者看護教育の主要な課題

実務経験を有する看護師に対して認知症高齢者看護を教育する上での課題が多くあげられた。認知症看護が重視する、本人を中心とした看護の展開について、特に、急性期病院で働く看護師にとっては通常の思考とは異なる思考や態度を求められるため、大き

な戸惑いとなる。また、できると思っていたことができないことを自覚させられ、自尊心の低下もたらす。教育する者には、学習者に「自己の変容」という課題をもたらされることを意識し、課題を乗り越えるよう支援する役割がある。

認知症看護が重視する、本人を中心とした看護の展開は倫理的な側面をもつ。この教育をどのように実施するかが一つのポイントとなる。研究2の学習経験者のインタビューで、倫理の授業の際に自己を振り返り、感涙するほど心を動かされた体験をしたことが語られた。このような体験は、研究3の文献検討で認知症看護教育に重要ととらえた「感動の瞬間」(Merriam et al. 2008/2010)の体験であり、学びのスピリチュアルな側面といえる。しかし、「感動」は基礎教育課程の学生に比べ実務経験者の学習場面では経験しづらいことも考えられた。この「感動」の瞬間をいかにつくるかは教育の課題として検討していく必要がある。

学習者の課題として、教育者からも学習者からもとりあげられたのは、アセスメントについてであった。アセスメントについてどのように教授していくかは認知症高齢者看護教育の課題であり、その教育方法の提示が求められている。

(2) 認知症高齢者看護教育を構造としてとらえる試み

研究成果をふまえて認知症高齢者看護教育を構造として示す試みを行った。その結果、「認知症看護観」「認知症看護教育観」という哲学的、倫理的側面をもつ教育基盤の上に、さまざまな「知識」と「科学的・分析的な思考」を支柱とし、「認知症看護の実践方法」を積み上げるという図式を示した。

この図を用いて教育内容や方法を検討できる。この図式化された考え方にに基づき実証的に研究することが今後の課題である。

(3) 認知症看護を実践するための「アセスメント」に焦点をあてた学習・教育方法論の展開に向けて

認知症高齢者看護の特徴として、アセスメントとして把握すべき点が多いことがあげられる。加えて、表面的な情報にとらわれることなく、その情報が示す意味を解釈してとらえる必要がある。つまり、多くの情報をとらえ、解釈する必要がある。認知症高齢者看護のためのアセスメントにおけるこの特徴、すなわちアセスメントに活用すべき情報が多く、複雑なこと(多元性、多面性)と意味をとらえる必要があること(解釈の深さによって内容が変わること)を図式として示した。

診断仮説を作動記憶に置きつつ情報収集をするとすれば、同時に考慮可能な診断仮説の最大容量は4個程度でしかない(伊藤ら、2016)と言われるように、学習者にとって「多くのことを一度にとらえ、判断することは難しい」ことを教育者は知っておく必要がある。認知症高齢者の看護を行うことを前提とし

たアセスメント技法とその教育方法を開発する必要があると考えられた。

(4) 結論

実務経験をもつ看護師に対して認知症高齢者看護を教育する際の主要な課題として、「アセスメントについてどのように教授していくか」があげられた。

認知症高齢者看護教育を構造として示す試みの結果、「認知症看護観」「認知症看護教育観」という哲学的、倫理的側面をもつ教育基盤の上に、さまざまな「知識」と「科学的・分析的な思考」を支柱とし、「認知症看護の実践方法」を積み上げるという図式を示した。また、認知症看護を実践するための「アセスメント」に焦点をあてた学習・教育方法論の展開に向けて、学習する内容に広がりや深さがあることを図示した。

教育者は、学習者が看護師としての実務経験をもつからこそ抱く困難感と、その学び方の特徴を知って教育する方法を工夫する必要がある。また、教育者のさまざま配慮は、学習者が学習に対する意欲を持ち続けるために必須であると考えられた。

<引用文献>

- Dawns M., Capstick A., Baldwin P.C., Surr C., Bruce E.(2009).The role of higher education in transforming the quality of dementia care: dementia studies at the University of Bradford. International Psychogeriatrics, 21, supplement1, S3-S15.
- 厚生労働省(2012).「認知症施策推進5か年計画(オレンジプラン)」について. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh.html>(平成24年9月5日発表)
- 原祥子、吉岡佐知子、實金栄、太湯好子(2012). 介護老人福祉施設における認知症ケア指針の開発. 日本認知症ケア学会誌、11(3): 678-389.
- 堀内ふき(2010). 看護師を対象とした教育の現状と課題. 老年精神医学雑誌、21: 1071-1073.
- 伊藤敬介、大西弘高(2016). ナースのための臨床推論で身につく院内トリアージ. 学研メディカル秀潤社、p42-45.
- Merriam S.B. et al.(2008).立田慶裕ら訳(2010). 成人学習理論の新しい動向-脳や身体による学習からグローバル化まで. 福村書店、p51-p53.
- 宮下真由美(2009). 手術医学、30(4): 303-304.
- 中村伸枝、奥朋子、松本ゆり子他(2012). 専門看護師・認定看護師の実習における評価票の検討. p33-p37.
- 湯浅美千代他(2013). 認知症高齢者の身体合併症治療時の看護スキルと看護管理方法の開発 平成21年度~24年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)研究成果報告書.
- 湯浅美千代他(2013). 認知症対応力向上研修テキスト. 東京都保健福祉局高齢社会対策

部在宅支援課 . p5 .

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 3 件)

Michiyo Yuasa (発表者), Hiromi Shimada, Tomoko Sugiyama, Suwa Sayuri, Mayuko Tsujimura, Atsuko Shimamura: Challenges of Experienced Nurses in Learning Dementia Nursing: Interviews with Nursing Educators. 32th International Conference of Alzheimer's Disease(2017).

湯浅美千代 (発表者), 諏訪さゆり, 島田広美, 杉山智子, 辻村真由子, 島村敦子: 認知症看護認定看護師教育における実習での学習支援ニーズ 学習経験者の意見から . 日本看護科学学会第 36 回学術集会 (2016) .

湯浅美千代 (発表者), 諏訪さゆり, 辻村真由子, 島村敦子, 島田広美, 杉山智子: 認知症看護認定看護師教育課程における実習に伴う学習者の困難とその支援 . 千葉看護学会第 22 回学術集会 (2016) .

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等 : 該当なし

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

湯浅 美千代 (YUASA, Michiyo)
順天堂大学・医療看護学部・教授
研究者番号 : 70237494

(2) 研究分担者

諏訪 さゆり (SUWA, Sayuri)
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号 : 30262182

(3) 連携研究者

島田 広美 (Shimada, Hiromi)
順天堂大学・医療看護学部・前任准教授
研究者番号 : 00279837

杉山 智子 (Sugiyama, Tomoko)
順天堂大学・医療看護学部・准教授
研究者番号 : 90459032

辻村 真由子 (Tsujimura, Mayuko)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号 : 30514252

(4) 研究協力者

島村 敦子 (Shimamura, Atsuko)
千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程